

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月17日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010 ~ 2012

課題番号：22520090

研究課題名（和文） 感応と表象—美術の宗教的機能に関する基礎的考察

研究課題名（英文） Spiritual Resonance and Representation: The fundamental study on the religious function of art

研究代表者

長岡 龍作 (NAGAOKA RYUSAKU)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70189108

研究成果の概要（和文）：本研究では、美術を、何かの代替物を意味する「表象」として捉え、超越者と人間との交感を意味する「感応」との関わりを探求した。そのために、①仏の感応そのものの表象、②仏の感応を呼び起こす場、③仏の感応を呼び起こす場の表象、の各柱を設けて調査ならびに分析をおこなった。①については仏像・絵巻・宗教説話、②については寺院や経塚の立地、③については庭園や屏風という具体的な事例を調査し、その成果に則して、美術の宗教的な機能の特性についてあきらかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, as first, I regarded “art” as “representation” that means substitute article and then examined the relationship of the Spiritual Resonance and Art. For this study I focused on the three aspects; ① the representation of Buddhist Spiritual Resonance itself, ② the space where Buddhist Spiritual Resonance occur, ③ the representation of the space where Buddhist Spiritual Resonance occur. I examined Buddhist sculptures, handscroll paintings or religious narratives from ① aspect, the site of Buddhist temple or Kyo-zuka (the sacred place where sutras were buried) from ② aspect, and gardens or folding screens from ③ aspect. According to the results of examines and researches, I characterized the religious function of art.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：美術史

1. 研究開始当初の背景

従来の美術史の主な関心は、美術作品の帰属とその様式であった。例えば、風景を描いた絵画があったとして、まずそれはいつ誰が描いたものであるかを問い、次にどう描いたものかを問う。作品が確かに存在し、作品自体に問いかけが向けられている時、なぜこの絵はあるのかという問いは起こりにくく、また、問いかけたとしても答えは得にくい。その回答を得るためには、作品の外部を参照しなければならないが、現代では作品は本来あった場所から離れており、当初のコンテクストを復元するのが困難な場合が多いからだ。

なぜ作品があるのかと問うことは作品の機能を問題にすることである。この観点から美術を考えるととき有効なのが「表象」(representation) という概念である。ゴンブリッチが述べるように、美術を表象として捉えるとき、それは何かの代替物として把握される(「棒馬考」)。つまり、風景を描いた絵は、現実の風景の替わりとなるために存在するという見方が成立する。本研究が美術を考える時の第一の観点がこれだ。

第二に本研究は、「感応」という現象に注目する。「感応」とは、「この上ない誠は何事にも感通する」(『中庸』)という中国の伝統的な考え方を適用し、衆生に善根の機縁があれば仏はこれに応じるとした仏教の考え方である。仏は、何らかの表象をあらわし、応えた証拠を衆生に示す。

「表象」と「感応」をキーワードとして美術を考えることは、本研究の代表者が自覚的に進めている方法であり、これまでに、いくつかの成果の中でその有効性を示してきた。また、「感応」を仏が衆生に示す宗教的奇跡としてみれば、それに関連して、東京大学グローバル COE 研究班が国際シンポジウム「礼

拝像と奇跡 東西比較の試み」(2008年5月31日)を美術史学会と共催して開き、学界の関心を喚起したことも特筆される。このシンポジウムには、申請者も発表者として招待された。本研究はその折の発表(『死生学研究』12号)を踏まえ、さらに発展させる目的で企画したものである。

2. 研究の目的

美術史研究は、帰属と様式の考察が伝統的であり、近年は、社会的・政治的な機能を持つものとして把握することがおこなわれている。本研究は、そのような現状に対して、前近代社会の基底には、現実の出来事を背後世界との関係の中で理解しようとする観念があったと考える立場から、美術の宗教的な機能を探究することを目的としている。この目的のために、何かの代替物という意味の「表象」という観点から美術を捉え、それを、仏が応えるという意味の「感応」という現象の中に位置づけるという新たな方法を構想した。

感応にはそれにふさわしい場がある。それゆえ、このテーマは場と美術の関係を追究することに等しい。そのために、本研究では、(1)感応そのものの表象、(2)感応の場、(3)感応の場の表象、の三つの柱を立てて、調査と分析を進める。

また、近代の美術史は、作品を場から切り離すところから始まり、絵画、彫刻、工芸というジャンルへと切り分けてきた。しかしながら、美術の宗教的機能を考えるという本研究の方法は、ジャンルの統合と場への回帰を必然的に導くものである。上述した個別調査の成果を集積し、感応の場において美術が果たす役割を立体的に再構成することによって、近代の美術史の方法論をもう一度見直し、宗教美術を考える新たな理論的枠組みを構築

する。

3. 研究の方法

本研究では、感応と表象という問題を探求するために、次の三つのテーマについて考察を加える。

- (1) 仏の感応そのものの表象
- (2) 仏の感応を呼び起こす場（山水）
- (3) 仏の感応を呼び起こす場の表象（山水画・庭園）

中国においていうところの「感応」は日本では「靈驗」として理解された。本研究は、以上の三点について、特に日本における具体的なありようを調査することを通して、美術はそれが置かれる場と不可分なものであり、それらは一体となって宗教的な意味を上げていることをあきらかにする。以下、それぞれの内容について略述する。

- (1) 仏の感応そのものの表象

ここでは、①仏典の説く内容に応じて表現された奇跡表現、②媒介者を通して示された奇跡、③隠喩として感応をあらわす事例、のそれぞれを探索する。

- (2) 仏の感応を呼び起こす場

感応あるいは靈驗が起きる場を、①神仙的な場とされた土地、②詩歌に詠じられた土地、③経塚の所在する場の三点において求め、現地踏査によって、その景観の具体的様相を確かめる。

- (3) 仏の感応を呼び起こす場の表象

この項目では、①山水を描いた屏風・障壁画、②庭園の二点においてその空間構造を探究する。

4. 研究成果

上述の方法に基づき、各年度において、

- (1) 感応そのものの表象、(2) 感応の場、(3) 感応の場の表象の三つの柱について調査と分析を進めた。柱ごとの成果は以下の通

り。

(1) ①粉河寺縁起絵巻をとりあげてその表現について分析を加え、観音の靈驗を媒介する童子の意味、自然景を繰り返し描くことの意味を検討した。その結果、平安時代後期に意識された靈驗とその表象の特色を析出することができた。

②東北地方の寺社に遺る観音像について総合的に検討を加えた。対象とした寺社は、仙台市十八夜観世音堂、福島大藏寺、秋田小沼神社、法用寺、八槻都々古別神社である。その結果、観音像自体の靈驗表現と像が置かれる場所の意味を明らかにした。

③東大寺の観音像について検討をおこない、蓮華蔵世界において、行者が辿る十地の階梯に対する不空罽索観音の役割についてあきらかにした。

(2) ①中国隋代仁寿舍利塔の起塔地、②古代日本の靈驗観音寺院、③平安後期以降の経塚の所在地、④平安後期以降の寺院の庭園を現地調査し、それらの景観の構造を分析した。①では、文献的な検討により、仁寿舍利塔の起塔が儒仏道の習合的な意味を持っていることを明らかにした上で、感応を期して起られた舍利塔の起塔地が風水思想に基づく山水観によって選ばれた一定の地形を条件としていることを確認した。また、文帝が自ら指示した起塔寺院のうち、涇州大興国寺、蘇州虎丘山寺、秦州静念寺、秦州永寧寺、蒋州栖霞寺、雍州西寺、同州大興国寺（陝西省大荔県）、華州思覺寺（渭南市華県）、涇州大雲寺（涇川市）、隴州薬王寺（宝鶏市隴県）、利州思覺寺（広元市）、梓州華林寺（綿陽市三台県）、益州法聚寺（成都市）、瓜州崇教寺（敦煌市）の寺址を調査し、景観と土地の意味について分析を加えた。

②は長谷寺や壺阪寺などの古代の靈驗寺院が立地する「勝地」は地形を条件としている

ことを明らかにした上で平安初期と後期のそれに変化の見られることを指摘した。

③では、文献的な検討により経塚が「霊験所」に営まれることを指摘した上で、経塚の所在地と地形の関係、宗教思想上の意味に分析を加えた。

④では、樺崎寺跡（栃木県足利市）、東福寺（京都市）を現地調査し、庭園と堂宇の関係について見通しを得た。また、仙台市龍寶寺に伝来する清涼寺式釈迦如来像の原所在地（金成）を調査し、像と景観の有意な関係を明らかにした。

また、⑤として高橋由一思想について感応の観点から分析を加え、彼が構想した螺旋展画閣が江戸時代のさざえ堂に起源を持つことをあらためて確認し、由一の絵画の展示施設構想が、人の心性に働きかけるという動機に支えられていることを明らかにした。さらに、高橋由一が展画閣建設予定地とした招魂社地、肖像画館の建設を構想した国府台、しばしば真景図を描いた浅草を現地調査し、それらの景観の構造及び由一の視線を分析した。

(3) ①山水を伴う平等院鳳凰堂仏後壁の表現について分析を加え、その主題その主題が阿闍世王の釈迦への帰依であるという新たな解釈を獲得した。②奈良時代から平安時代までの日本の庭園について文献的な検討をおこない、庭園の仏教思想上の意味を分析した。その結果、従来の研究では十分に論じられてはこなかった庭園の宗教的意味があきらかになった。さらに③聖武天皇を追善する各種の願文は、死後聖武天皇が蓮華蔵世界に登ることを祈願していることをふまえ、国家珍宝帳に記載される正倉院宝物のうち特に屏風について検討を加え、奈良時代の死後観と光明皇后の奉納意図について新たな見通しを獲得した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 長岡龍作、蓮華蔵世界と観音、ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集、査読無、10号、2012年、41-57
- ② 長岡龍作、金剛寺蔵 木造地藏菩薩半跏像、国華、査読有、1393、2011、46-47
- ③ 長岡龍作、霊験と観音像、『美術フォーラム21』、査読無、第22号、2010、30-36

[学会発表] (計4件)

- ① 長岡龍作、Buddhist Soteriology and The Functions of Figurative Art、3rd Congress of the International Committee of the History of Art、2012年7月16日、Nuremberg(Germany)
- ② 長岡龍作、蓮華蔵世界と観音—習合思想を手がかりに一、ザ・グレイトブッダ・シンポジウム、招待発表、2011年12月11日、東大寺総合文化センター
- ③ 長岡龍作、滅罪の場としての庭園—平等院の意味を再考する—、美術史学会東支部大会、2011年12月4日、仙台市博物館
- ④ 長岡龍作、山水と仏像—仏教実践の場と表象の機能、国際シンポジウム「Image and Objects in Japanese Buddhist Practice」、招待発表、2010年10月8日、米国・コロンビア大学

[図書] (計9件)

- ① 長岡龍作 (共著)、勉誠出版、中国中世仏教石刻の研究、2013、154-181 (340頁のうち)
- ② 長岡龍作 (責任編集)、小学館、日本美術全集第2巻 法隆寺と奈良の寺院、2012、287頁

- ③ 長岡龍作 (共著)、竹林舎、論集・東洋日本美術史と現場—見つめる・守る・伝える、2012、192-208 頁 (525 頁のうち)
- ④ 長岡龍作 (共著)、ぺりかん社、日本思想史講座 1—古代、2012、289-322 (395 頁のうち)
- ⑤ 長岡龍作 (共著)、東北大学出版会、建築遺産 保存と再生の思考—災害・空間・歴史、2012、263-284 (540 頁のうち)
- ⑥ 長岡龍作 (共著)、東北大学出版会、今を生きる 1 人間として、2012、33-44 (203 頁のうち)
- ⑦ 長岡龍作 (共著)、仙台市博物館、仏のかたち 人のすがた 仙台ゆかりの仏像と肖像彫刻、2011、5-10 (131 頁のうち)
- ⑧ 長岡龍作 (共著)、校成出版社、新アジア仏教史 第 1 3 巻 日本仏教の定着、2010、331-363 (459 頁のうち)
- ⑨ 長岡龍作 (共著)、高志書院、兵たちの時代 3 兵たちの極楽浄土、2010、66-96 (235 頁のうち)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長岡 龍作 (NAGAOKA RYUSAKU)
 東北大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号：70189108

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：